

社会科

山 岸 郁 生
松 下 浩 一
笹 山 明 夫
吉 川 昌 博

1 社会科の本質について

わたしたちは社会科の本質を、次のように考えている。

社会の一員としての自覚を持つこと

小学校教育における社会科とは、身の回りにある様々な事象を人の営みとのかかわりでとらえていく教科だとわたしたちは考えている。

(人の営みとのかかわりでとらえていく事象のことをこれ以降社会的事象とよぶことにする)

すなわち、人の営みの中には、さまざまな思いや願い、その事象の現れに至るまでの経緯や因果関係、試行錯誤の上に生み出された仕組みの巧みさや叡智が集結された技術のすばらしさなどが内在されている。それらを自分のくらしとのかかわりの中で、自分なりにとらえていくことを大切にしたい教科だと考える。そして、このような人の営みや身の回りにある事象の中に内在する意味や働きをとらえていくという学習過程を通して、自分のくらしは様々な人の営みに支えられて成り立っていることを実感できる。さらには、それらの人の営みに自分自身が何らかの形でかかわって生きていることを自覚することになる。このような自覚が、すなわち、小学校段階での「社会の一員の自覚を持つこと」であり、いずれ将来にわたっても、社会生活を営むための素地になっていくものと考えている。

よって、わたしたちは「社会の一員としての自覚を持つこと」を社会科の本質ととらえたわけである。

この本質を学ぶためには、自分なりの解決方法で社会的事象の中にある人の営みの事実を明らかにしながら、その事象と自分のくらしとの関連性を認識したり、事象の持つ意味や働きなどを自分なりの見方・考え方でとらえたりしていくことを大切にしたい。このように身のまわりにある事象に対する自分なりの見方・考え方を身につけていくことが、社会科で求める「知性と教養」を培うことになると考える。この「知性と教養」を培うことが、今後どのような事象と出会っても、今まで身につけてきた見方・考え方を生かしながら、問題解決していこうとする力へとつながっていくであろう。さらに、民主的・平和的な国家・社会の形成のために、主体的かつ創造的に働きかけたいこうとする人格を育成することにも大きく寄与するものと考えている。

2 社会科の「学び」について

上記の本質を獲得するために、社会科の「学び」はどうあればよいのか。わたしたちは次のように考える。

子どもたちは、学びの場で、ある社会的事象と出会うと、既存の社会的なものの見方・考え方や過去の生活体験などをもとにその事象に内在する社会的な意味や働きをとらえようとする。しかし、それでもうまくとらえられないときに、学習問題が生まれ、その問題に対して自分なりの仮説・予想を立てた上で調べ活動が行われる。この調べ活動の中で収集した情報を自分なりに比較・分類したり、関連づけたり、統合したりして、問題解決に向けた自分なりの考えを構築していく。そして、その考えを全体に表明したり、共有化したりすることで、自分の考えを見つめ直し、ときにはさらなる調べ活動を経て、自分の考えを再構築していく。このような問題解決のプロセスをくり返していくことで、より一層自分なりの社会的なものの見方・考え方が深まっていくことであろう。以上のような一連の「学び」の中でこそ、「知性と教養」が培われていくと考えている。

これまで述べたことを図に表すと、下図のようになる。

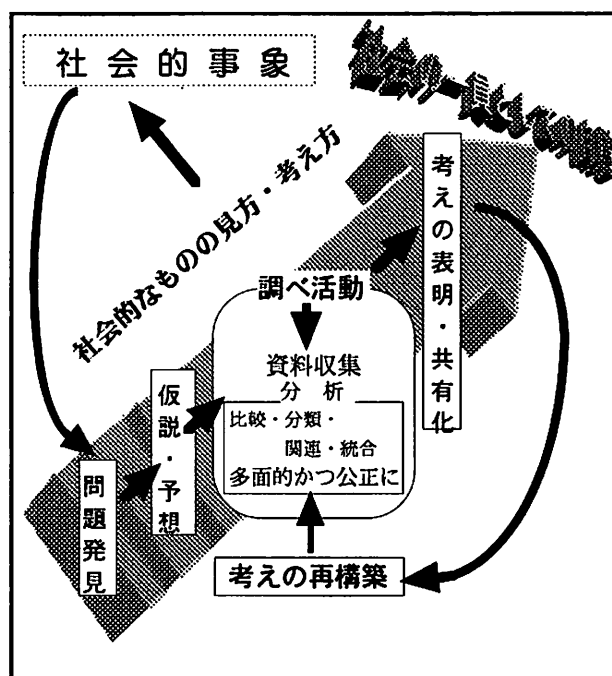


図1 社会科における「学び」の構造

3 本質と学びにもとづく 基礎・基本について

それでは、社会科で大切にしたい基礎・基本とは何か。先ほどからも何度か述べているように、私たちは次のように考えている。

社会的なものの見方・考え方を身につけていくこと

上記でとらえた「社会の一員としての自覚を持つこと」という本質に迫るためには、社会的なものの見方や考え方を身につけることが不可欠であると考えます。

では、「社会的なものの見方・考え方を身につけていくこと」とは具体的にどういうことなのか。まず、身の回りにある社会的事象を様々な人々の営みや自然・国土の様子ならびに地域や国とのかかわりから見たり考えたりすることが大切になる。その上でその事象が自分のくらしの中でどのような位置づけにあり、意味あいを持つのか、あるいは、どのような仕組みを持ち、自分のくらしにどのような影響を与えているのか、など社会的事象の持つ意味や働きをとらえていくことができることである。そして、このとらえができていく中で、どのような事象に会っても公正な判断ができた、社会的な義務や責任を感じ行動しようとしたり、といった正しい社会生活を営む素地が培われるものと考えます。以上のことから、社会的なものの見方・考え方を身につけていくことが、社会の一員としての自覚を持つことにつながると考える。

4 単元を構成するにあたって

社会科において、自己の「学び」を深めるとは、社会的事象の持つ意味や働きを自分のくらしとのかかわりの中でとらえ、自分なりの解決方法を通して、社会的なものの見方や考え方が変容したり、社会の一員としての自覚が深まったりすることである。実際の単元に下ろして実践するにあたっては、以下に述べる視点にもとづいて、単元を構成していく。

(1) 一人一人の社会的事象への

はたらきかけを促す

子ども一人一人が、社会的事象に意欲的にはたらきかけることができるように、まず、単元導入の出会いの場を工夫する。例えば、子どもにとって、身近な事象や驚きや感動を与える事象、意外性のある事象などを用意するなどの工夫である。次に、子ども一人一人の多様な思いや願いに応えるために、各自が興味・関心のもつ事象や課題や学習方法などを選択できる複線的な学習の流れを意図していくといった学習過程を工夫することである。これらの工夫により、子どもの追究意欲の持続も図っていききたい。さらに、問題意識を高めたり、自分なりの

考えを確認できるような体験的な活動の場も設定していきたい。

(2) 一人一人の素朴な思いや考えの

表現を促す

ある社会的事象との出会いや友だちとの考えとのふれあいなどから生まれた驚きや感動、疑問などが問題解決のスタートになることが多い。このような飾り気のない子どもの主観的な思いや考えが全体の中で出されることにより、子どもは意欲的にその社会的事象の持つ意味や働きに迫ろうと問題解決的な学習の過程へと向かうのである。よって、教師は、自分の思いを表明しやすい雰囲気大切にしながら、子どもから発せられる素朴な思いや考えを言明されたものだけでなく、つぶやきやノートの言葉、さらに調べ活動の様子などから取り上げていくことが大切な教師の働きかけであると考えます。

(3) 自分なりの見方・考え方を

交流する場を設定する

自分なりに問題解決していく中で、自分の解決方法や自分の見方・考え方を振り返り見直すために、あるいは、他からの情報収集をしたくなったり、自分の見方・考え方を高めていくためにも、他の友だちの見方・考え方を交流する場の設定が必要にあるであろう。それが従来のお互いの考えを発表し合う場であったり、ディベートや討論の場であったり、ワークショップやポスターセッションの形であったりなど形態は様々である。その交流の仕方やタイミングなどは、子供の追究活動がさらに深まったり、見方・考え方が深まったりするように配慮して設定していきたい。

(4) 子ども自身の変容の自覚を促す

社会的事象に対する当初自分の抱いた思いや考えが、追究活動の中でどのように変容していったのかを自覚することは、すなわち、自分と社会とのかかわりを自覚することにつながるとともに、問題解決的な学習の仕方を身につけることができたという自覚にもつながる。

そこで、社会的事象に対する予想や仮説を明記させたのち、追究過程のポイントごとに自分の考えをノートやカード等にイラストやキャッチフレーズとして、あるいは文章という形で書き留めたり、調べ方に対しては自分の追求方法の成果や反省などを書き留めることにする。各自書き留めていったノートやカード等を機会を設けながら振り返ることにより、自分の見方や考え方ならびに学び方の変容を自覚する場としていきたい。また、各自の調べたことを発表・交流する場でも、それぞれの追究内容ならびに追究方法に対する自己評価や他者評価する場を設けて、自己の変容の自覚を促していきたい。

5 実践例 ― 3 年 ―

(1) 小単元名 金沢 ONE PIECE 物語 ～1枚の地図から想いを深めて～

- (2) 目 標 ・ 1 枚の地図から市の土地の様子に関心を持ち、市の地形や土地利用の様子について意欲的に調べ、市の様子について地形や土地利用の様子、交通の様子などと結びつけて考えることができる。

(3) 指導にあたって

本単元の基礎・基本について

本小単元は、学校の周りの様子の学習の後を受けて、視点を市全体へと広げる単元である。市には、平地や山地、海に面したところなど、いろいろな地形の様子がみられる。人々は、その土地の条件を生かして住宅地や商店、田畑、森林などに利用して生活している。子どもたちは日頃、何気なく市の様子を見ているが、地形や土地利用の様子を人々の生活と結びつけて考えることはほとんどない。また、金沢市という行政区分を意識することもないであろう。本小単元では、学校の周りの学習を手がかりに市の地形や土地利用の様子や人々の生活について関心を持ち、様々な調べ方を工夫しながら、それらを結びつけて考えることをねらいとしている。

まず、自分たちの作り上げた学校の周りの地図から学習を始めることは子どもたちにとって関心も高く、意欲的に学習を進めていくであろう。また、金沢市のパズルを通して市の土地の様子を知ることから、市に住んでいる人々に想いを繋げていくことができるのではないかと考える。そして、自分の住んでいる地域を直接調べたり、資料などで調べたりすることを通して土地利用の様子や交通の様子などにも気づいていくことができるようになっている教材である。

本単元では、自分たちが調べた市の様子を地形や土地利用の様子と結びつけた見方ができるとともに、市の様子について自分なりの思いを持つことができることが基礎・基本であると考えられている。また、資質・能力の向上を考えると本単元では、地図を読みとる力、自分で情報を取材し、収集する力といった情報活用能力や集めた情報から考える思考力などを培うことができると考えられる。

単元計画（総時数 15 時間）

主 な 活 動 と 内 容	学びを深めるために	主な評価ポイント
1 市の様子について関心を持ち 調べてみようとする意欲を持つ ・ 私たちがすんでいるのは金沢市だよ 金沢市ってどんな町かな	①②	金沢市全体の様子に興味関心を持つことができたか
2 市の様子について調べ 土地の様子等が分かり 自分なりの思いを持つ ＜中学校の屋上から見て調べよう＞ ・ 北の方は 南の方は 東の方は 西の方は ＜金沢市の地図で調べてみよう＞ ・ 地図がパズルみたいにバラバラだよ ＜みんなで金沢市を組み立ててみよう＞ ・ 金沢市の地図ができたぞ ＜金沢市ってどんなところだろう＞ ・ この地図からわかることはないかな？ 北の方は 南の方は 東の方は 西の方は どんな人が ・ 写真からも考えてみよう ＜金沢市縦断バス見学に出かけよう＞ ・ バスに乗って、海から山地まで見てこよう ＜金沢市の様子はどうかだったかな＞ ・ たくさん分かったけど市はまだまだ広いな ＜自分たちの住んでいるところはどうかだったかな＞ ・ わかったことを白地図にまとめていこう ＜わからないところは本や資料で調べよう＞ ・ 金沢市の様子が分かったぞ 北の方は 南の方 東の方は 西の方は	①②③	地形図や写真から市の様子について土地利用などと結びつけて考えることができたか
3 市の様子について分かったことや思いを自分なりにまとめる ＜金沢市の様子についてわかったことを 「私たちの金沢知っとるけ 新聞」にまとめよう＞ ・ それぞれの新聞ができたら掲示してお互いに読み合おう ・ だれの新聞が素敵にできているかな	②③④	学習したことから自分なりの方法で市の様子を表現することができたか

学びを深めるために

① 一人一人の社会的事象への働きかけを促す

まず、前単元で学習した学校の周りの地図を振り返ることから学習を進めていきたい。そこから市の有名などころや自分の知っているところを発表し合うことで、市の様子を調べていこうとする意欲を高めていきたいと考えた。また、市の様子を調べる段階では、地図や写真ではつかみきれないところを実際にバスで見学する場を設定することで、一人一人の調べる興味や関心を持続させることができると考えている。

② 一人一人の素朴な思いや考えの表現を促す

「金沢市って、山に囲まれているのかな」「家や店がとっても多いよ」のような驚きや感動を大切にしたい。そのために地図の提示の仕方を工夫したり、地図パズルなどをしたりすることで、市の様子に対するその子なりの思いを持てるようにしたい。また、考えたり書いたりする時間を十分にとることで「金沢市にはこんなにも山が多かったんだ」のようなその子なりの素直な思いや考えがしっかりと持てるようにしたいと考えた。

③ 自分なりの見方・考え方を交流する場を設定する

市の様子についての自分なりの思いや考えを交流し合うことで、新しい見方や考え方に気づいていたり、さらに見方や考え方を深めていたりすることができる考えた。そこで、学習のポイントごとに自分の思いや考えを書き出すだけでなく、お互いの思いや考えを発表し合う場を設けた。そして、目のつけ所がよかったりする考えなどを教師が認めたり誉めたりするだけでなく、子どもたちがお互いに認め合ったりすることで、自分の考え方をより深めていたり、違う見方ができるようになったりしていけると考えた。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

調べ活動に入る前に市の様子について思っていたこと、見学後に考えたこと、調べ活動終了後に考えたことなどを比べながらまとめさせたい。そこで、単元のポイント毎に市の様子に対するその子なりの思いや考えを金沢Impressionとしてノートに書き表していくことにした。そうすることで、自分の市の様子に対する思いや考えがどのように変容していったのかが自分でもわかるのではないかと考えた。それは、見方や考え方の変容にもつながると考えている。

(4)本単元における授業の実践と考察

本単元では、学校の周りの学習を手がかりに市の地形や土地利用の様子や人々の生活について関心を持ち、様々な調べ方を工夫しながら、それらを結びつけて考えることをねらいとしている。まず、子どもたちは自分たちが住んでいるのが金沢市であるということを知る。その時に今までに持っている自分なりの金沢市のイメージがどんなものなのか考察したい。次に中学校の屋上から見た市の様子についてまとめた後の金沢市に対する思いがどう変化したのかを考察したい。次に、地形図のパズルや市の様子を撮った写真を見た後で、その思いの変化を見たい。最後に、実際に市の様子を見学した後でその思いがどのように変化したのか、また、深まったり広まったりしたのかを考察したい。

① 金沢市に対する初発のImpression

単元の実践

- 1 市の様子について関心を持ち 調べてみようとする意欲を持つ

子どものノートより

- A児：家の近くはかが多い
ビルがいっぱいあったし木や林がある
B児：自然がいっぱいあるんじゃないかなあ
C児：石川県の中心のようなところで、
石川県で一番大きいところだと思います

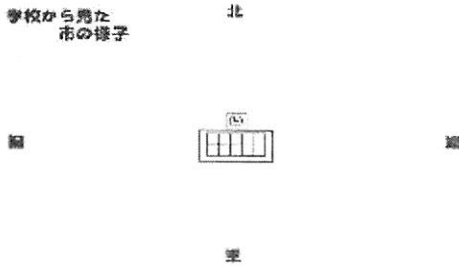
金沢自然体の様子に興味関心を持つことができたか

まず、自分たちが住んでいるのが「金沢市」であるということをはっきりとさせた後、学習する前の思いを書いてみた。家やビルなどが多くてにぎやかであるとして書いている子が28名、逆に自然が多いと書いている子は4名、県の中心であると書いている子が2名いた。

A児の内容からは自分の家の周りの様子がしっかりと出ている。このように子どもたちは、自分の住んでいる家の周りの様子や、通学の途中の様子などから思いを持って書いていたようである。

2 市の様子について調べ 土地の様子が分 かり 自分なりの思いを持つ ＜中学校の屋上から見て調べよう＞

学校から見た
市の様子



屋上から眺めたときに使用したカード

子どものノートより

- E児：山につつまれているみたいで 山
がたくさんあるところだと思った
D児：ぜんぶ山でかこまれている
北はすごく大きな町 東はわから
ない 南は山？ 西は大きな町？
北、東、南、西によってちがうの
かな
B児：こんなに広いとは思いませんでした
とても大きいビルがあったり
こんなにいっぱい竹林とかしぜん
がいっぱいあってきれいだなと思
いました



附属中学校から見た北の方角



附属中学校から見た西の方角

また、B児は最近に引っ越してきており、まだ市
の様子がよく分かっていないので予想するような
内容となっている。それに対してC児のように、
知識が豊富にあり、金沢市が石川県の県庁所在地
であるということまで知っている子どももいた。
これらから考えるとほぼ全員が市全体の様子に興
味関心を持つことができたようである。

② 金沢市を眺めてのImpression

地形図や写真から市の様子について土地利用
などと結びつけて考えることができたか

そこで、どうやったら市の様子を調べることが
できるかという話し合いになった。すると、学校
の周りの学習の時と同じように高いところから眺
めれば少しわかるのではないかということになっ
た。それで、附属中学校の屋上から市の様子を眺
めてみることにした。見たことは左のようなカー
ドに書いておいた。その際には後でイメージをふ
くらませ易いように言葉で書くだけでなく、絵で
も描かせておいた。見てきたことを教室でまとめ
た後に、市の様子を眺めての思いを書かせた。

山のことを書いている子が27名、東西南北を
意識して書いた子が18名、にぎやかさと結びつ
けて書いた子が7名、広さと結びつけて書いた子
が2名などとなった。

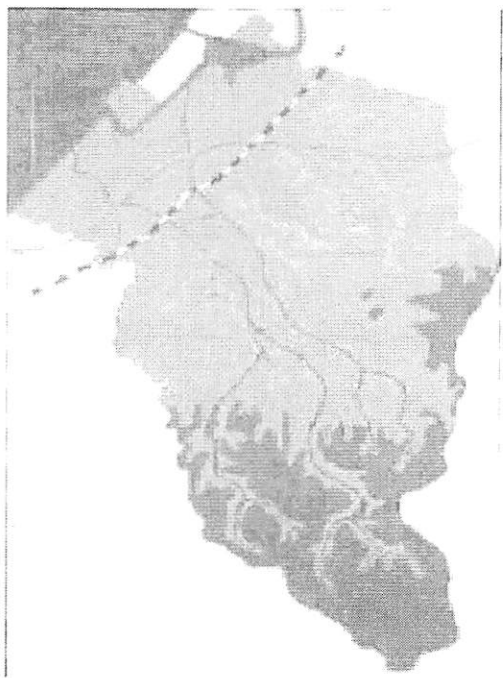
E児は特に山を意識して書いている。実際、北
の方には町並みの向こうに卯辰山や小立野台地
にある兼六園の森が見え、東には小立野台地から続
く山並みが見えている。また、南には視界いっば
いに野田山が見えており、西だけが開けて、住宅
地が広がっている。このような状況では、山に思
いを持つ子が増えるのは当然のことであろう。ま
た、山に包まれている、あるいは囲まれていると
いう思いにもなるであろう。

D児のように東西南北を強く意識して書いてい
る子も多かった。学校の周りの学習の時から子
どもたちに意識して指導してきた結果であろう。

B児は、金沢についてあまり知らなかったの
で、限られた範囲だが、自分の目で見て驚きが多
かったであろう。「こんなに広いとは思いません
でした」の言葉は、他の子にとっても同じで
あっただろう。日頃自分の家の周りや学校までの
通学の途中しか知らない子どもたちである。そん
な子どもたちにとって金沢市といえば、自分の生
活している範囲でしか捉えていなかったであろ
う。そういった意味でいえば、この屋上から眺め
る活動は、子どもたちのイメージを広げる上で大
変役立ったといえるであろう。

子どもたちは市の様子を地形とまた、今まで町
といえば、家やマンション、田や畑などしか知ら

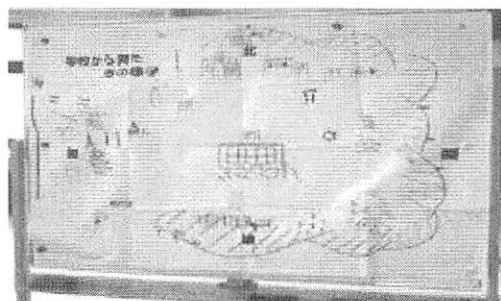
＜金沢市の地図で調べてみよう＞



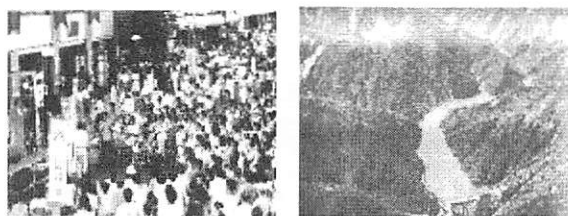
完成した地形図パズル



パズルに熱中する子どもたち



板書



地図とともに提示した写真

なかった子どもたちにとって山を意識づけるのにも大変よかったと思われる。このように、ここでも評価ポイントはなんとかほぼ達成できた。

③ 金沢市の地図で調べてのImpression

地形図や写真から市の様子について土地利用などと結びつけて考えることができたか

屋上から見ただけでは市の様子はわからない。そこで子どもたちは学校の周りの学習と同じように地図があればわかるのではないかと考えた。そこで市の地形図パズルを与えた。パズルを完成させた後、3枚の写真を用意しておき地図を合わせて見てもらった。その後、市の様子についてのImpressionを書いた。

山について書いた子が25名、にぎやかさと結びつけて書いた子が21名、東西南北を利用して書いた子が8名、地形図の色と結びつけて書いた子が1名などであった。

H児は、今まで具体的な建物ばかりに目がいてしまい、全体としてとらえることができていなかった。しかし、地形図パズルを見ることで金沢市全体の姿が見ることができた。そこで初めて、山地の広さに気づくことができたのではないだろうか。地形図パズルで市全体の様子を見てよかった。このパズルでは、完成するまでは全体像をつかむことはできない。しかし、完成させる過程で自分の持っている一つのPieceが何を表しているのか、市全体のどの部分にあるのか、周りはどうなっているのかなどのように一人一人がそれぞれ思いを持って地図を見ることができた。

F児は、地形図を見てもしっかりと東西南北で捉えている。これは、板書を東西南北を意識して書いたこともあるだろうが、これまでの学習がしっかりと積み重ねられている結果であろう。静かであることやにぎやかであることの原因については書いていないが、他の子の書いたことから判断すると、次のようになる。静かなのは人も少なく、自然や鳥の鳴き声がするからである。また、にぎやかなのは人がいっぱいであわただしいからである。つまり、人が多いのにぎやかで、人が少ないと静かであるという捉え方である。この捉えは、これまでの学習の結果から出てきたものである。また、少しでも分かりやすいようにと写真を用意しておいたこともよかったのであろう。地図からはなかなか読みとりにくかった子どもたちも、写真になると少し具体的になり、意見が出しやすかったようであった。

G児は、地形図の色に着目している。色と土地の高さの関係をしっかりと把握できている。地形図パズルに着色するとき、山地、台地、平地が

子どものノートより

F児：北には人が住んでいる所や田んぼがあって 南には山や川があって 東には低い山とかがあります 北西には海がありました だから半分静かでもう半分が人がたくさん住んでいてにぎやか

G児：茶色い所は高くて人があんまりいなくて 地面が平べったい所がにぎやかで人がたくさんいる 茶色い山が高い場所 黄土色は地面が低くて人が多い場所だ 黄緑色は住宅地が多い所だ 金沢市は広い

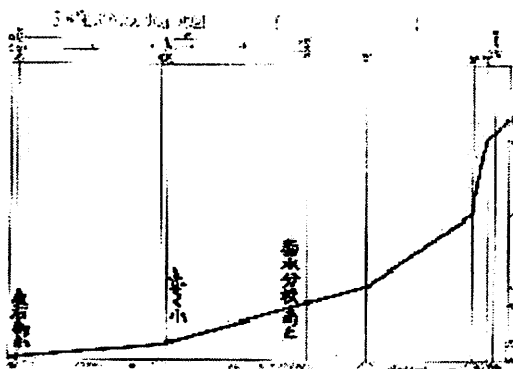
H児：最初は思わなかったけど山がたくさんあると思ってきました。山に小さい川が続いていると思いませんでした。

I児：端っこは家があんまりなく 真ん中は家がたくさんある

<金沢市縦断バス見学に出かけよう>



バス見学のしおり



金石町と菊水町の高低差

はっきりとわかるようにしたことが影響しているのであろう。また、他の子も同様であろうが、ここで初めて金沢市の全体を見たのである。学校の場所も明示したので、それと比べて金沢市の広さに改めて驚きが持てたのではないだろうか。しかし、地形図の色に着目した子が1名であったということは、地形図の色分けは土地利用の様子の理解にはあまり役立っていなかったようであった。

I児は、前回までは東西南北を使っの捉えもできていた。でも、今回はちょっと書く内容が少なく思われた。時間が十分にあったのに、短い文章しか書けない子が何人かいた。その理由を考えてみると、地形図パズルを見ての思いを発表させていった時になかなか意見が出てこなかったことにあるのかもしれない。学校の周りのとても具体的な地図から、いきなり抽象化された地図へと移行したせいもあるのであろう。地形図を読み取るのは難しかったようである。また、地図を見てどんなことを言えばよいのかがよく分からなかったのも原因の一つであろう。教師の方の指示が曖昧で、地図を完成させたことについて言えばよいのか、見て思ったことを言えばよいのかがはっきりとしていなかったようであった。しかし、左のような図も一緒に描かれており、徐々に言葉だけでなくイメージでも捉えようとしている姿も見られたことは地図を利用したことから少し抽象的な考え方ができる子も出てきたといえるであろう。

評価ポイントの面で考えてみると、ほとんどの子が土地利用などと結びつけて書いている。それはほとんどが写真からのものである。やはり、まだ具体的な資料の方が有用であったようである。また、子どもたちは予想通り、地図パズルに夢中になった。一生懸命に自分のPieceがどこになるのかを考えていた。そのうちに何人かの子が自分たちの持っているPieceをいくつか合わせ始めた。そしていくつかの部分同士を組み合わせる地図を完成させ始めたのであった。予想としては1時間ぐらいかかるであろうと考えていたが、15分ぐらいで完成させることができた。高められていったようである。

④ バスで見学した後のImpression

地形図や写真から市の様子について土地利用などと結びつけて考えることができたか

地図や写真からだけでは、市全体の様子をしっかりととらえることはなかなかできない。そこで、全部といえないが、子どもたちが興味を持った海と山を見学に行くことにした。

海は、金石の海である。金石町小学校には5階



金石町小学校から見た海



菊水分校跡の周りの様子

子どものノートより

J児：いろいろなものがあってすごい場所

K児：地図から見たらちっちゃく見えるけど ほんとは広いんだなと思いました

D児：平地と台地と山地にわかれている 北・西は平地で 東・南は山地がある そして台地は平地と山地のまん中

H児：山に住んでいる人もいるけど 今は下の方の町に住んでいてにぎやかになったと思いました べんきょうして 市に海や高速道路もあると思いました。

建ての展望室がある。そこからは土地がだんだんと高くなっている様子が見ることができる。また、広い海も一望のもとにできるからである。

山は、内川小学校の菊水分校跡である。標高500mほどもあり、山に囲まれており、マイクロバスで見学が可能だからである。

見学後、金沢市についての思いをもう一度書いた。結果は、山と結びつけて書いた子が23名、にぎやかさと結びつけて書いた子が15名、いろいろなところがあると書いた子6名などである。

J児は、見学の印象が強かったのか一言しかかけていない。この傾向は他の子にも当てはまる。前回に書いたときには、長い文章を書いた子が多かった。それだけ地形図パズルがインパクトがあったのであろう。しかし今回は、海を見たことや、行ったことのない山奥の方にまで出かけたこと、さらに見てきた場所が多かったことからその中で何をかいて良いのか分からなくなった子がいたようである。

K児の思いもJ児と同じであろう。地図で見る金沢市はたいへん小さい。地形図パズルでも扉1枚の大きさである。それしか見ていなかったのに見学では約2時間かけて海から山までバスで移動した。まだこの奥へも金沢市が続いているという事実を知ったのである。素直な思いであろう。

D児は屋上から眺めた後、「北、東、南、西によってちがうのかな」という思いを書いていた。金沢市の様子を調べてきて、自分なりの課題をしっかりと解決できている。地図や写真、見学などを取り入れて興味・関心を高めることができていたからであろう。

H児は、初めは「家やアパートが多い」のような漠然とした思いしかかけなかった。しかし今回、人の移動により町ができるということまでかけた。このことは実際に見学をすることが子どもたちの見方・考え方を深めていくのに役立ったと考える。

評価ポイントについてみれば、前回からみても十分欠けていると思われる。

④ 授業を終えて

本単元では、金沢市の様子について自分なりの思いをもてることを意識して授業を進めてきた。そのために、単元の節目毎にノートに金沢市に対する思いを「金沢Impression」として書き続けてきた。それらは、単に教師側の評価としてだけでなく、子どもたちが自分の学習してきた足跡を確認できるものとしても活用できるものであったと考えられる。また、シートやカードに書いたものもノートに張り付けていった。それは、自分の考えを持つためのステーションがノートであり、そこに自分の学習してきた足跡が必ず残るものだからである。それで、子どもたちもノートを見ればすべてがわかるという思いになり、ノートをきちんと取るようになってきている。また、社会的事象への働きかけを促すために取り入れた地形図パズルやバスでの見学は、一人一人の興味・関心をうまく高めることができていた。

ただ、地図の見方や子どもたちの思いを授業に生かしていくことについては、まだまだ考える必要がありそうである。

(1) 単元名 きょうどを開く～人々の願いがつくった長坂用水～

- (2) 目 標 ・地域に広がる用水の開発につくした先人について調べ、先人の働きや苦心や願いを当時の人々の生活の様子や考え方、道具や技術の面から考え、人々の生活と用水との関わりを自分なりにまとめることができる。

(3) 指導にあたって

本単元における基礎・基本について

金沢は用水の町だといわれるほど市内各地に多くの用水がある。用水は田畑に水を送る大切な役割をするばかりでなく、様々な生活の場面で必要なものである。しかし子どもたちは、単なる小さな川といった認識しか持たないと思われる。用水はわたし達の生活を支えていること、その開発に力をつくした人がいることを知り、先人の苦労や工夫にふれ、地域に対する愛着や先人に対する誇りを子どもたちに持ってほしいと考えている。

本単元では、校外学習などで子どもたちが時々目にしている長坂用水の開発を中心に取り上げる。長坂用水は、今から330年前に約4年をかけて完成した全長約9kmの用水である。十村役である後藤太兵衛らが中心となり、のべ36万人を動員した加賀藩直営の大工事であった。用水の完成によって、人の住まない荒れ地だった野田、長坂、泉野の地域には、100haもの新田が開発され、村が形成されていった。その用水工事には様々な苦労と工夫があった。特に17のトンネル工事では、落盤事故が相次ぎ、多数の死傷者が出たといわれる。また、取水口の小原地区から野田までの険しい溪谷や山間部をゆるやかな傾斜で水を流すようにするには、高度な測量技術が要求されたであろう。

こうして完成した長坂用水は、長い年月を経た現在でも本校のそばを流れ、地域の人々の農業などにとって大切なものとなっている。昔と今の長坂の様子を比較したり、見学をしたりすることによって学習意欲を高め、身近な先人の苦労と工夫に気づかせるとともに、用水の流れを今も守り続けている長坂用水土地改良区を中心とする人たちの努力についても学ばせていきたい。また、自分の家の近くを流れる他の用水について調べ、それらが地域の生活に役立っていることを

単元計画 総時数15時間

主な活動と内容	学びを深めるために	主な評価ポイント
<p>1 土地の使われ方を観察し 用水に対する問題意識を持つ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・田んぼや畑があるなあ ・そばを用水が流れている ・長坂用水はどこからどこへ流れていくのだろう ＜用水ができる前とできた後の長坂の様子を比べよう＞ ・田や畑ができたんだなあ ・人が住めるようになったんだなあ ＜長坂用水を探検しよう＞ ・険しいがけに沿って流れているよ ・古いトンネルがあるよ ＜長坂用水はどのようにしてつくられたのだろう＞ <p>2 長坂用水の工事の様子を調べ 工事にともなう先人の苦労や工夫を知り 用水に対する当時の人々や現在の人々の願いについて知る ①②③④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・後藤太兵衛らが中心となり 農民たちが工事に参加したんだ ・4年間で36万人もの人々が働いたんだ ・険しい谷や山の高さを考えたり 17のトンネルをほる大変な工事 	<p>①②</p>	<p>長坂用水について 自分なりの言葉でイメージフレーズに書き表すことができたか</p> <p>人々の苦労や工夫 願いによってつくり上げられた用水であることを表現できたか</p>
<p>大変な思いまでしてなぜ用水をつくったのだろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・用水の完成によって広い田畑がつくられ 新しい村ができた ・330年たった今も役に立っているんだ ＜長い間どのようにして守り続けてきたのだろう＞ ・そうじをしたり 修理をしたりしてくれる人がいるのかな ・守っている人がいたら聞いてみたいな ＜みんなが住んでいる近くにも用水はあるのかな？調べてみよう＞ <p>3 金沢のいろいろな用水について知る ①②③④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・辰巳用水 鞍月用水 大野庄用水などがあるよ ・金沢にはたくさんの用水があるんだね ・用水のおかげで人々は田畑をつくることができるんだね 		<p>用水が今も人々の努力によって守り続けられていることを表現できたか</p> <p>金沢にはたくさんの用水があり それらがわたしたちのくらしを支えていることを表現できたか</p>

とらえさせたい。これらの学びを通して、自分たちのくらしは用水の恩恵を受けているということに気づくことができるだろうと考えている。

本単元の基礎・基本は、地域に広がる用水を先人の苦労や工夫や願い、また用水を守り続ける人々の努力という視点でとらえ、わたしたちのくらしと用水との関わりについて考えるということである。そして、豊かなくらしに対する強い願いをもとに人々が苦労して用水をつくり上げたということを自分なりにとらえていく思考力を培いたいと考えている。

学びを深めるために

① 一人一人の社会的事象への働きかけを促す

まず3年次の学習をもとに学校周辺を再度観察することで、用水の存在を意識づけたい。その上で、用水が引かれる前と後の長坂周辺の様子を表した2枚の絵を提示することによって、土地の様子の変化に気づかせ、用水に対する興味・関心を高めるようにしていきたい。また、用水を見学する場を設定し、つくられた場所や規模などを自分の目で確かめることで問題意識を持たせることができると考えている。そして、子どもたちの興味・関心をもとに調べる観点を明確にしたいと考える

② 一人一人の素朴な思いや考えの表明を促す場を設定する

用水が通っている土地の様子や、当時の古いトンネルを見学する場を設定することによって、「よくこんな所に用水をつくったものだ」「トンネルは暗かったなあ」などという子どもたちの素朴な思いが引き出せ、用水のつくり方を調べてみたいという問題解決的な学習へとつながっていくだろう。また、工事で使われた道具などの具体的な資料をもとに体験する場を設けたりすることによって、工事に携わった人々の苦労に共感した思いを引き出せるであろう。その場における見学メモや感想、つぶやきなどを大切に、全体へと広げていきたい。

③ 自分なりの見方・考え方を交流する場を設定する

長坂用水がどのようにしてつくられたのかについて、自分なりの観点を調べたことを発表し合えるようにする。その際、自分が伝えたいことをできるだけポイントを絞ってわかりやすく伝えられるようあらかじめグループごとに助言していくことにする。そして、発表する中で大変な工事だったということを明らかにした上で、人々の思いや願いについて意見を交流する場を設けていきたい。

④ 子ども自身の変容の自覚を促す

学習を進めることにより、長坂用水に対する自分の見方にも変化が表れてくるだろう。そうした変化を学習過程のポイントごとに「長坂用水イメージ・フレーズ」として書き留めることによって、自己の変容の自覚を促していきたい。何気ない小さな川だと思っていた用水が、実は先人の苦労や願いのこめられたものだということに気づきに変容が見られるだろう。そして、学習の終わりにイメージフレーズを一覧表にまとめていくことで、その変容の様子をふり返る場としたい。

(4) 本単元における授業の実践と考察

長坂用水の開発につくした人々の働きや苦心や願いに少しでも迫れるようにしたいと考えて、本単元を構成するにあたっては、用水に対する関心を持つ場、見学して調べ活動をする場、交流する場を設けることにした。そして、それらの学習過程において「長坂用水イメージ・フレーズ」というふり返りを書く活動を取り入れることにした。これは、長坂用水に対するイメージを短い言葉で自分なりに表現したものである。このイメージ・フレーズを通して、用水に対する意識の変化を観ていこうと考えたからである。単元計画の主な評価ポイントや活動内容に沿って考察を進めていきたい。

単元の実践

- 1 土地の使われ方を観察し用水に対する問題意識を持つ

<これは何だろう>

- ・川かな?
- ・用水だよ
- ・長坂用水という名前だよ。

<長坂用水のイメージを

短い言葉に表してみよう>

① 長坂用水を見学してみて

長坂用水について、自分なりの言葉でイメージ・フレーズに書き表すことができたか

ア 初めて長坂用水を見て

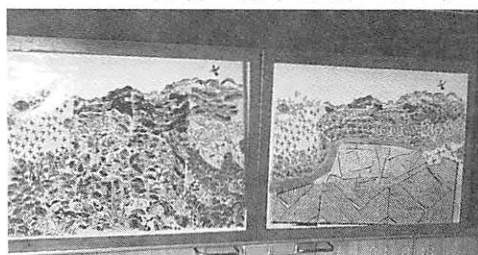
ほとんどの子は、用水という言葉も知らなかったの
で、長坂用水を見てもただの川にしか見えなかったよ
うだ。田畑に水を入れるためのものであることを説明
できる子もいたが、大半の子は流れていく水の様子に

C:どうやって書けばいいの？
C:俳句みたいに書いてみよう



長坂用水の地図

<用水ができる前とできた後の
長坂の様子を比べよう>



用水ができる前と後をくらべて

- ・昔はあれた土地だったんだね
- ・長坂用水ができて田んぼができたんだ

<長坂用水を探検しよう>



用水を見学する子どもたち

見学メモより

- 水の流れについて
 - ・流れがおそい
 - ・水がにごっていた
 - ・ごみは少ない
- トンネルの様子について
 - ・暗くて長そう
 - ・岩のように固い

目を奪われているだけのようだった。そして、用水が流れていく道筋に沿って歩き、用水沿いにある田畑の様子を観察した後、初めて長坂用水に対するイメージを表現してみた。

- 児：水がきれいな長坂用水
- Y児：ちょっときたない長坂用水
- T児：田んぼにね、水を入れるよ長坂用水

○児は、あまりごみがなく、水がスムーズに流れている様子を表現したものと思われる。それに対し、Y児は、用水が枝分かれして幅がせまくなり、曲がりくねるようになってごみがつまりやすくなっていたところを表現したようである。

ほとんどの子が水質や流れ方に関心があるのに対してT児は、この川が田に水を供給していることを知ってびっくりしていた。そして、田畑と用水がつながっている部分を見て感心していた。

- ・水の様子や流れについて・32名
- ・用水の役割について・・・2名

まだ表面的にしか用水を見ることができていない段階である。そこで、用水ができることでこの辺りの土地の様子はどう変わったのかを考えることによって用水に対する関心を高め、用水の役割に気づかせていきたいと考えた。左記の2枚の絵を通してくらべてみたところ、自分たちの学校周辺の土地が昔は荒地で、用水が引かれることによって田が広がり、人が住めるようになったということを知り、子どもたちはとても驚いたようだった。そして、「この用水がどのようにして流れてくるのか見に行きたい」という意見が出てきたので、上流の様子や当時につくられたトンネルなどを見学しに行くことにした。

イ 上流の様子を見学してみて

用水沿いに上流に向かって歩くことで、途中で水路が分かれたり、幅が広くなったりせまくなったりする様子を見ることができた。目的地では、330年前につくられたトンネルをのぞき込んだり、写真を撮ったりして記録に残そうとする姿が見られた。見学後のイメージ・フレーズは次の通りであった。

- Y児：きれいに見えてきた長坂用水
- D児：トンネルは中がまっ暗ぶきみだな
- N児：つくるのに大変だった長坂用水
- R児：人々の暮らしに役立つ長坂用水

上流は流れが遅く、水はにごっていたにもかかわらず、Y児は反対に上記のように表現した。それは、後で「よくこんな用水を人がつくったものだ」と感想を書いたように、工事に参加した人のことを意識するようになってきたからだと考えられる。そのことは、N児についても同様である。R児は、前回「何を書いていいのかわからない」と何度もつぶやいていた子であ

- ・ほったきずみたいのがある
- 地形などについて
 - ・竹やぶの中を流れている
 - ・まわりががけ
 - ・石や岩が多い
- その他
 - ・「きけん」のかんばんがある
 - ・お化けが出そう

＜長坂用水はどのようにして
つくられたのだろう＞

- 2 長坂用水の工事の様子を調べ、
工事にもなう先人の苦労や工夫
を知り、用水に対する当時の人々
や現在の人々の願いについて知る

追求内容

- ①用水をつくることになったわけ
- ②どのような人が工事に参加したのか
- ③どれだけの人がどれだけの時間をかけてつくったのか
- ④きけんながけに用水を通したのはなぜ
- ⑤どんな道具をどのように使ってトンネルをほったのか
- ⑥トンネルをうまくほるための工夫
- ⑦工事で起こった事故やけがとは



＜大変だったのになぜ
工事に参加したのかな＞

- C:長坂に田を作りたいから命が
けで参加した
- C:田をもらいたかった
- C:農民は身分が低く、との様は高い
ので、農民はさからえなかった。
田を持っているが、もっとほしい
ということもある。
- C:資料に「民にとって大切」と書い
てある。農民にとって大切だし、
農民も田を広げたいと思っている。
- T:田を作りたいし、との様も喜ば

る。先の2枚の絵をくらべる学習を通して、用水の役
割を考えるようになり、さらに人の生活との関わりを
意識するようになっていったのである。

- ・水の流れについて書いた子・・・22名
- ・トンネルの様子について書いた子・・・9名
- ・地形などについて書いた子・・・2名
- ・生活と用水を結びつけて書いた子・・・3名

しかし、まだ多くの子は水の流れ方などの表面的な
とらえ方をしているのが現状である。見学を通して多
くの子どもたちから、「どのようにトンネルをほった
のかな」「なぜこんなあぶないところにつくったのか
な」という素朴な疑問が出てきていたので、次に調べ
る活動を取り入れることにした。

② 工事の様子を調べ 交流してみて

人々の苦労や工夫、願いによって長坂用水が
つくり上げられたことを表現できたか

「長坂用水はどのようにしてつくられたのか」という
問題を設定し、追求内容を7つに分けてグループを作
り、調べ活動をした。資料収集に関しては、子どもたち
に任せるにはやや難しいと思われたので、教師の方でプ
リントを準備し、子どもが必要に応じて持っていくとい
う支援をした。発表にあたっては、クイズや劇、体験コー
ナーなど自分たちの内容に合う形を選択させて行っ
た。そして、発表を通して、いかに工事が大変だったか
ということをはっきりさせた上で、工事に参加した人々
の思いを考えることにした。この学習を通して書いたイ
メージ・フレーズは下の通りである。

U児：用水は工夫をしてね、つくってる

O児：なぜきけんなところに通すかわかった長坂用水

G児：昔の人はつくるのに大変だった長坂用水

O児のグループでは、「きけんながけに用水を通した
わけ」を調べたいと意欲的だった。上流での見学の際の
印象が強かったようである。しかし、適当な資料が見つ
からずに困っていた。そこで、「用水はゆっくりと流れ
なければ田畑に水を送れない」という学習を想起させ
るとともに、トンネル工事について調べているグループの
様子を紹介すると、「トンネル工事は大変だからできる
だけしない方がいい」ということに気がつき、がけを通
る方がいいと考えた。そして、簡単な模型をつくってピ
ー玉を転がしてわかりやすく説明した。発表したとき、
みんなが彼の考え方と模型を使うという工夫に感心した
のでとても満足げであった。

G児のグループでは、道具について実際につるはしや
たがねなどが手に入ったので、みんなに体験してもら
おうと意欲的であった。発表の際には、持ち上げる子
の動作や表情をよく観察し、感想を求めたりしていた。
自分自身も道具の重さが心に残っていたようだ。

ほとんどの子が長坂用水の工事がいかに大変だったか

せたい。

C:「仕方がなく」ではなく、食料が作れないので用水をつくった。



農民の気持ちについての話し合い



＜長い間どのようなして

守り続けてきたのだろう＞

主な予想

- ・毎日見回りにいっている
- ・ごみが流れないようにさくをする
- ・ごみを捨てないように呼びかける
- ・こわれたら直す



吉田さんの話を聞いた感想

- ・吉田さんはがんばっているなあ
- ・これからも長坂用水を、私たちのためにも守っていった下さい
- ・すごく大変な仕事だなあ
- ・用水を守っている人は、用水を大切に使っている人だ
- ・守る人がいて340年も流れ続けているんだな

ということを意識してイメージ・フレーズに表していた。また、U児のように工夫に着目して表現している子もいた。しかし、話し合いの中では子どもたちは、「田がほしい、作りたい、広げたい」という農民の気持ちを述べていたものの、田や米に対する強い願いを表現したイメージ・フレーズはなかった。このことは、子どもたちが調べたことに満足してしまい、やや意欲が薄れてしまったことや、当時の農民の米に対する願いがとらえきれなかったことによるものと考えられる。適切な資料の必要性を強く感じた。

③ ゲストとの交流を通して

用水が今も人々の努力によって守り続けられていることを表現できたか

およそ40年前の長坂から泉野にかけての写真を提示したところ、一面に広がる田に子どもたちは驚きの声をあげた。広大な田に水を供給し続けてきたことを物語る貴重な写真である。330年の間、長坂用水は当時のままだったかと問うと、「こわれたり、トンネルがくずれたりしたはずだ、コンクリートになっているところもあったし、鉄の水門もあったから」と答えた。ではいったい、だれがどのようにして長坂用水を守っているのだろう、ということになり、用水工事に使われた道具を貸して下さった長坂土地改良区理事の吉田明さんに話を伺う場を取り入れることにした。

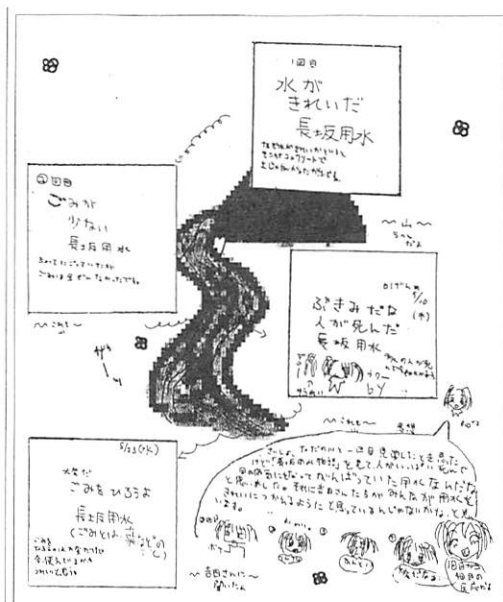
どの子も予想段階では、ゴミを拾ったりしてきれいにしたり、こわれたところがあれば直したりしていると考えていた。概ねその通りであるが、実際に守る仕事をしている吉田さんを前にすると一つ一つの言葉に重みを感じられ、子どもたちは真剣な表情で耳を傾けていた。

M児：守る仕事がんばってください

S児：長坂用水、300年守り続けてすごいな

M児は、これまで人や暮らしとの関わりでイメージ・フレーズを書いていなかったが、この学習で吉田さんに呼びかけるような表現になった。そして、話をしていたことに感謝の気持ちをこめて感想を書けるようになった。S児は、守り続ける人に着目するようになってきた。吉田さんの先祖が用水をつくったのかもしれないということに目を輝かせ、「吉田さんの先祖はさぞ、かしこかっただろうなあ」と感想を書いた。このように、どの子も守る人によって用水が大切にされてきたことを表現できていた。実際に仕事に携わっている方と交流をすることによって自分の予想を確かめ、用水が大切であることをあらためて意識することができたと考ええる。

これまで書いたイメージ・フレーズを1枚の紙にまとめてみた。F児は、これまでの学習において、自分なりの思いを持っていたようだが、そのことをイメージ・フレーズにうまく表現しきれない様子だった。あらためてふり返ってみたところ、自分の意識の変化が見えて



F児のまとめ

<みんなの家の近くにも用水は
あるのかな？調べてみよう>

3 金沢のいろいろな用水について 知る

《きこめの感想》
 私は金沢に54ヶ所もある用水があると
 聞いて、そして加賀市と比べて100万石
 も米がとれるわけは用水があるからです。
 昔は用水は田や畑(加賀市もそう)に
 使われていました。そして今、田や畑、必要
 を減らすためにも、いろいろあります。
 とても便利で、そして今も昔もかわらなく
 使われています。

イメージイラスト
 今も昔もありがたう
 長坂用水

Y児の感想

《きこめの感想》用水が金沢市全体に
 金沢市には用水がたくさんあることを
 知りました。
 そして用水は、みんなの生活に
 関係していることを、用水はつくられた
 ころからずっとそのおかげをたてて
 きたんだなあ、と感心しました。

イメージイラスト
 水にたえる
 みんなの用水

A児の感想

田んぼがたくさんあるということ
 がわかった。用水の水は、みんな
 の生活に使っているということ
 がわかった。大切。用水の全
 てをみてみたい。長い用
 水で、はっしーをききたい。

J児の感想

きたようである。読み物資料である「長坂用水物語」を
 読むことによって、ただの川だと思っていた用水が、
 人々の努力によってつくられたものであることに気づい
 たと書いている。まとめる活動を通して、用水の大切さ
 を再認識し、そのことを自分なりの言葉で表現できるよ
 うになった。

④ 金沢市にたくさん用水があることを知って

金沢市にはたくさんの用水があり それらがわたし
 たちの暮らしを支えていることを表現できたか

長坂用水を学習して、自分たちの住んでいる近くにも
 他の用水がないか調べてみることにした。みんなが調べ
 てきた用水を地図上に表すと実に多くの用水が市内を流
 れていることがわかった。54という数の多さに子ども
 たちは驚いていた。また、単に農業用水としてだけでなく、
 洗濯や水遊びや除雪に使われるなど、昔からずっと
 自分たちの日常生活において利用されていることに深く
 心を動かされた様子だった。

Y児は、休日に辰巳用水を調べてきた。自分の家のそ
 ばから取水口までたどり、地図や写真を使ってわかりや
 すくまとめてあり、とても意欲的な取り組みであった。
 その取り組みのきっかけとなったのが長坂用水の学習で
 あったことが推測できる。

A児は、自分の身近に用水があったことに感動して法
 島用水を調べてきた。そして、用水の役割を知り、用水
 に対する感謝の気持ちを表現していた。

J児は、用水が単に田畑に水を供給するだけでなく、
 様々な生活の場面で利用されている大切なものであるこ
 とを表現できていた。それは、用水が金沢市全体に広
 がっていることを知り、わたしたちの生活を支えている
 ことに気づいたからである。「用水の全てをみてみた
 い」という表現にJ児の学習意欲の高まりが感じられ
 る。

⑤ 単元を終えて

本単元に入ったころは、単なる小さな川だとしか感じ
 なかった子どもたちが、用水の役割や意味、そして用水
 をつくった人々の努力や工夫、思いや願いについて考
 え、表現するようになってきた。これは、単元全体を通
 して用水に対するイメージを書き続けることが子どもの
 意識変化の自覚をある程度促したからではないかと考え
 ている。短い言葉で用水をまとめるという活動は、初め
 てのことであり、子どもたちにも戸惑いがあったもの
 の、なれるにしたがって楽しんで書けるようになってき
 た。ただ、短い言葉だけでは他の子にうまく伝わらない
 ということもあったので、イラストなどを加えた方が効
 果的だったと思う。また、調べたことを交流するにあ
 たっては、今回は全体の前で1グループずつ発表してい
 くという形式を取ったため、やや単調になってしまっ

た。ポスターセッションのように少人数による交流を数多く取り入れていく方がよかったと反省
 している。今後も児童の実態や学習内容に応じた評価の方法や学習形態を考えて実践していきた
 いと考えている。